

『エッセー』初版における構成原理及び 第一巻と第二巻の対応関係

奥 村 真理子

序

モンテーニュの『エッセー』が単なる断章の寄せ集めではなく、章と章の間にはつながりがあること¹⁾、また第一巻初版が観念連合によって互いに結びついている章の連続において、螺旋運動によって円環を描いていることはすでに論じたことがある。本小論は、初版における第二巻の構成と第一巻との関係を考察することによって、観念連合による螺旋運動の描く円環が『エッセー』初版全体の構成原理となっていることを検証しようとする試みである。

1. 第二巻の初版における構成

第二巻の諸章の観念連合を辿ることによって、第二巻は以下のような部分に分類できる。

- | | | |
|-----------------------|---|-----------|
| 1-11：人間の行為の判断 | } | 第二巻のプロローグ |
| 第一巻の確認 | | |
| 『エッセー』について | | |
| 11-14：人類についての判断 | | |
| (11-17：自惚について) | | |
| 15-27：当時の社会の人々についての判断 | | |
| 28-36：個々の人間についての判断 | } | 第二巻のエピローグ |
| 37 ：『エッセー』について | | |
| 病氣と死 | | |

医学批判

人間の意見の多様性

初版『エッセー』

のエピローグ

第1章から第11章は第二巻のプロローグであると言える。第1章では、人間の行為の不定性と矛盾、人間の各々の行為を個別に判断する必要性が述べられている。

人間のもろもろの行為を検討することにならずさわる人々は、これらの行為を継ぎ合わせて、同じ光を当てて一様に見ようとするときほど当惑を感じることはない。なぜなら、これらの行為は時折、不思議なほど矛盾していて、とても同じ店から出たものとは思えないからである。(II, 1, *D. M.*, II, p. 1; *O. C.*, p. 316, a)

われわれの場合は、これ〔小カトーのように徳によって恒常な人物の場合〕と反対に、行為の数と同数の個々別々の判断が必要となる。(II, 1, *D. M.*, II, p. 4; *O. C.*, p. 317, a)

第2章以下はこの考えに基づく人間の個々の行為の判断であり、何らかのカテゴリーのもとにひとまとめにされている諸行為を識別しようとする。たとえば、第2章は醜態と他の不徳を区別し、諸々の不徳を十把一絡げにすることを批判する。この「人間の行為の判断」が第二巻の主要テーマであり、このテーマのもとに第二巻は展開してゆく。

第二に、プロローグでは第一巻でモンテーニュが行なった判断の確認がなされている。一例を挙げよう。第6章では、第一巻第20章で述べた「死に対し準備する方法」の正しさを落馬事件によって確信したことを語る。そしてさらに次のように述べ、自己を主題とするという『エッセー』の方法の確認を行なっている。

各人は自分を仔細に見つめることができさえすれば、自分が自分にとってきわめてよい教訓となる。(II, 6, *D. M.*, II, p. 58; *O. C.*, p. 357, a)

この文章の最後の部分は『エッセー』執筆というテーマに触れている。これがプロローグの第三のテーマである。第7章でモンテーニュは「名誉の本質は珍

しさにある」(II, 7, *D. M.*, II, p. 61; *O. C.*, p. 362, a) と述べているが、この珍しさという性質によって彼は「この〔『エッセー』を書くという〕愚かな企てを体面〔名誉〕を汚さずに片づけることができる」と第8章の冒頭で語る(II, 8, *D. M.*, II, p. 66; *O. C.*, p. 364, a)。この第8章と第9章は、『エッセー』という精神の産物(子供)への彼の愛情を表現している³⁾。第10章では『エッセー』に様々な材料を与えてきた読書について語られているが、これと同時にモンテーニュの判断の試み方と文章についての考え方が述べられている。従って、第8章から第10章は第7章を導入部として『エッセー』について語っているのである。

第11章の最終部から第17章は自惚というテーマをめぐる展開している。モンテーニュは自惚を自己の過大評価と他者の過小評価という二つの部分に分けている⁴⁾。この分類に従えば、第11章の終わりから第12章にかけては人類の他の被造物に対する過小評価、第12章から第14章は人類の自己過大評価、第15章は人類の自己過大評価を示す第12章の基本理念であるピュロニスム、第16章は人類が自惚によって自己に与えている榮譽が神にしか属さないこと、第17章はモンテーニュ自身の自己過大評価と他人に対する過小評価を扱っている。

他方、第11章から第14章では自然(宇宙)の中の一被造物としての人間について判断が行なわれている。第11章の最終部では動物に対する人類の思い上りへの言及がなされている。このテーマが第12章「レーモン・スポンの弁護」に引きつがれる。ここでモンテーニュが行なっているのは、「高慢と人間的思い上りをたたきつぶし、踏みにじってやること」であり、「人間のはかなさ、むなしさ、空虚さを思い知らせてやること」(II, 12, *D. M.*, II, p. 167; *O. C.*, p. 426, a)である。ここで判断の対象となっている人間は、次の文章にも見られるとおり、一被造物としての人間である。

このみじめで、ちっぽけな被造物〔人間〕が、自分自身を支配することもできないばかりか、あらゆる事物の攻撃にさらされているくせに、宇宙全体の主人であり女王だなどと自称すること以上に滑稽なことが考えられるだろうか。(II, 12, *D. M.*, II, pp. 169-170; *O. C.*, p. 427, a)

第13章は、「このみじめで、ちっぽけな被造物」が自分の死を、宇宙の秩序を

変える重大事であるかのように考えている思い上りの指摘が基本となって展開されている。また、第14章でも、人類の思い上りが論点である。

以上の事柄に〔…〕理論と実践が矛盾する事柄をつけ加えるならば、そこからおそらく、あのプリニウスの「不確実以外に確実なものはない。人間以上に惨めで思い上がったものは何もない」という大胆な言葉を支持する何かの論拠を引き出せるかも知れない。(II, 14, *D. M.*, II, p. 409; *O. C.*, p. 595, a)

第15章から第27章では当時の社会の人々についての判断が行なわれている。同時代の社会の人々のモラルが退廃し、武勇以外には何ら徳の行為がなされず、名誉を得るための徳の偽装行為が世に蔓延していることが指摘される。一方、支配者たちとは言えば、彼らが上記のような国民の悪徳を戒めるために用いている刑罰が効果を生まないこと、支配者たちの偽装行為は国家全体の利益のために容認しうるものであること、支配者が自分の安全しか考えず無為に陥っていること、彼らが残酷な復讐と刑罰に走るのには臆病さゆえであることなどが述べられている。

第28章から第36章では個人というレベルにおいて人間が判断されている。まず第28章から第32章では、ある人間を判断するには平常の行為をもって判断すべきであるという原則のもとに人間（個人）判断の方法論が述べられている。たとえば、第29章では、確固として不動の習慣となった徳と精神の一時の激情的高揚によるめざましい行為を区別し、後者の行為だけで人を徳高き人物だとみなすことはできないことが述べられている。また、第32章では、セネカとプルタルコスへの批判に対し彼らを弁護することによって、人間について下す判断の不適切な方法の具体例が示されている。特にプルタルコス弁護では、彼ら人間判断の方法を具体的に説明して弁護することによって、モンテーニュが模範とする人間判断の方法が紹介される。従って第32章は人間判断の方法論の総まとめである。

同時に、第32章ではモンテーニュが最もすぐれた著述家だと判断する人間を二人選んでいる。つまり、人間判断の実践結果を示しているのだ。これはすでに第28章（小カトー）等でもなされているが、特に第33章から第36章ではすぐれた人物だと判断された人物たちが並ぶ。第33章と第34章は三人の偉大な男性

の中に入れることのできなかつたカエサル、第35章は三人の良妻、第36章は三人の偉大な男性である。

これに続く第37章の冒頭では『エッセー』の執筆をもうすぐ終えようとしている著者の述懐がなされる。そして執筆を始めてからかかった腎臓結石という「もっとも苦しい、もっとも命取りの」(Ⅱ, 37, *D. M.*, Ⅱ, p. 602 ; *O. C.*, p. 738, a) 病気の発作にみまわれても、日頃から苦痛や死に対し準備してきたおかげで精神まで乱されることなく、むしろ疝痛によって死が完全に恐ろしくなくなりそうだと語っている。これはプロローグで確認された「死に対し準備する方法」の再確認である。またこれは後で述べるように第28章で言及されている老年にふさわしい勉強の成果であり、モンテーニュの老年における行為の自己評価である。従って第28章から第37章の前半までをひとつのブロックとみなし、ここには上記のように人間判断の方法論の総まとめとその実践結果、『エッセー』執筆についての述懐及び著者自身の行為の自己評価が扱われているので、「人間についての判断」をテーマとする第二巻のエピローグであると言える。

さて第37章では上記の『エッセー』執筆についての述懐と著者自身の行為の判断に続いて、医学批判が行なわれる。ここでは医学が「もっとも不確実で、もっとも混乱し、もっとも変化常なき学問」(Ⅱ, 37, *D. M.*, Ⅱ, p. 621 ; *O. C.*, p. 750, a) であることが示される。つまり、人間の意見の多様性のもっとも顕著な例を示しているのである。そしてこの人間の意見の多様性を理由に、著者自身の意見が相対的なものであることを認める言葉が最後に述べられる。従って第37章は著者が自己の判断の試みとして意見を述べてきた『エッセー』全体のエピローグである。

2. 螺旋運動

第二巻は以上のような部分に分類できるが、次に、先に示した分類の各部分の始めと終わりが呼応しあうことによって、これらの部分が螺旋状に連なっていることを示したい。

プロローグの最後の第11章では、第1章で言及されている徳に関して善と徳との区別をし、さらに徳の中にも第一段階の緊張した徳と第二段階の完全な習

慣となった徳が区別される。この第二段階の徳が、第1章で徳の極致としての恒常性を備えた人の見本として挙げられている小カトーの徳である。

人類についての判断の部分の内包する自惚をテーマとする部分の始めである第11章では、善・緊張による徳・習慣となった徳の区別の論からモンテーニュ自身の性分の話に移ってゆく。ここでモンテーニュは自分に備わっているのは二つの徳のいずれでもなく善であることを説明する。そのために、生まれつきの性分から不徳を嫌悪すること、不徳の中でも特に残酷を嫌い、他人や動物が残酷な目にあうのを見ることに耐えられないことなどを語っている。この彼の性分の詳しい叙述によって第11章の後半は彼の自画像になっている。一方、自惚についての部分の終わりである第17章は、第二巻の初版における最も詳細かつ膨大なモンテーニュの自画像である。ここで彼は自己を過大評価しないという点で自分が自惚れていることを示すために、自分の無能さと欠点を克明に描いて見せているのである。

当時の社会の人々についての判断の始めと終わり（第15章と第27章）は、いずれも国家秩序を守る方法としての刑罰の無効性を述べている。

これまでに刑罰によって国の秩序が改善されたためしがないことを私は経験で知っている。(II, 15, *D. M.*, II, p. 413; *O. C.*, p. 599, a)

私は単純な死刑以上の刑罰はすべて純粋な残酷であると思う。斬首刑や絞首刑にも平気で悪事を働くほどの人間が、とろ火や、やっこや、車裂きの死刑を考えて罪を犯すことに二の足を踏むなどとわれわれの裁判所が期待したら間違いである。そんなものはかえて彼らを自暴自棄に追い込むかもしれない。(II, 27, *D. M.*, II, p. 511; *O. C.*, p. 679, a)

第二巻のエピローグの始めと終わり（第28章と第37章）はいずれも老年における勉強について語っている。第28章では、「よりましな人間になってより仕合せにこの世から発てるために」(II, 28, *D. M.*, II, p. 513; *O. C.*, p. 682, a)する勉強だけが老年にふさわしいと述べている。これに呼応して、第37章では、モンテーニュがそれをしてきたこと、その成果を得つつあることを語っている。

このひどい苦痛〔痲痛〕の間には、私はすぐに普通の状態に戻る。〔…〕私の精神は感覚的肉体的な衝撃しか受けないからである。これは確かに、勉強と理性の力で日頃からこういう出来事に自分を準備しておいたおかげである。〔…〕私は、これまでのところ、私の精神をこのような状態に保ってきているので、このまま変えずに続けてゆくことができさえすれば、〔…〕かなり仕合せだと思っている。

(II, 37, D.M., II, pp. 606 - 607; O.C., pp. 740 - 741, a)

このように、始めと終わりが呼応しあうことによってそれぞれ小さな円環をなす各部分が普遍の人間（人類）から個別の人間（個人）へと視点の三段階を示しつつ連なることによって、第一巻と同様第二巻においても螺旋運動が見られる。

3. 第二巻全体としての円環

さらに第二巻全体も一つの大きな円環をなしている。

第二巻のプロローグ（第1章から第11章）もエピローグ（第28章から第37章）も、人間についての判断と『エッセー』の執筆という共通のテーマを扱っている。しかも、プロローグでは人間の個々の行為の識別を行なうのに対し、エピローグではそれを踏まえた上で一人の人間について判断を下す方法を述べ、その実践結果として偉大な人々を選んでみせる。『エッセー』執筆のテーマでは、プロローグでは著者の著書に対する愛情や『エッセー』に豊富な材料を与えている読書と文章の好みを述べるのに対し、エピローグでは、まさに執筆を終えようとしている著者として『エッセー』について述べている。また、第6章では第一巻で行なった諸判断の確認のひとつとして、「死に対し準備する方法」の正しさを確信したことが述べられるが、第37章では苦痛や死に対し準備してきた成果が語られている。

従って、プロローグとエピローグが共通のテーマを扱うことによって、第二巻全体はひとつの大きな円環を描いているのである。しかも2.で示したように始点から終点までの間にもさらに小さな円環が連なっていることによって、第二巻全体は螺旋運動によって円環を描いている。

4. 第一巻と第二巻の対応関係

1.で述べたように、第二巻では人間についての判断が、人類という一被造物としてのレベル・社会に生きる人間としてのレベル・個人としてのレベルにおいて行なわれている。ところで、別の所で論証したように⁵⁾、第一巻では「いかに生きるか」というテーマのもとに、自然の秩序・社会・個人という領域において判断がなされている。従って、第一巻も第二巻も自然の秩序・社会・個人という三つの視点にたってそれぞれのテーマを展開していることで対応関係にある。

モンテーニュが世界をこの三つの視点から見ていたことは第一巻第22章に明白に表われている⁶⁾。モンテーニュは「一方の得は他方の損」という法則が社会においても個人の内心の願いにおいても見られることを述べた後、これが自然の普遍的秩序であることに気付く。

なぜなら、自然学者たちは「それぞれの事物の出生と成長と増加は他の事物の変化と腐敗である」と言っているからである。(I, 22, *D.M.*, I, pp. 133 – 134 ; *O.C.*, p. 106, a)

さて、このような三つの視点にたって展開されるテーマは、第一巻では「いかに生きるか」であり、第二巻では「人間についていかなる判断を下すか」である。換言すれば、第一巻は「なすべき行為の判断」、第二巻は「なされた行為の判断」という人間に関する表裏一体をなすテーマを扱っている⁷⁾。従って、上記の三つの視点に沿って展開されるテーマにおいても第一巻と第二巻は対応関係にある。

そこで再び、第一巻と第二巻の自然の秩序・社会・個人という三つの部分の内容に注目してみると、あらゆる内容においてではないが、根本的な点で対応関係が見られる。

第一巻の自然の秩序における不幸に対する生き方において「なすべき行為」として最も重視されているのは、第19章「われわれの幸福は死後でなければ判断してはならぬこと」で述べられているように、死に直面した時にとる行為である。立派な態度で死ぬことが人間の幸福を決定するというのである。他方、

第二巻の人類というレベルにおける人間についての判断ではどうだろう。第13章は「他人の死を判断することについて」という題である。ここでは、他人が落ち着いた死に方をしたからといって即座に立派な死に方をしたと判断することはできない、なぜなら人間は自分を重大なものと自惚れるあまりなかなか死期に達したとは考えないから、と述べられている。そして、単に死を恐れないことと、死を自覚して味わおうとすることと、小カトーのように死に敢然と立ち向い打ち負かす死に方との間に区別をもうけている。

第一巻の社会における不幸（宗教戦争という内乱）に対する生き方では、国家の秩序を守ることが重要な「なすべき行為」である。他方、第二巻の当時の社会の人々についての判断では、国家の秩序を守る手段として用いられている残酷な刑罰が有効な手段ではないと批判している。

第一巻の個人生活の部分で「なすべき行為」は、名誉・地位・富などではなく、自分自身によって幸福になることであり、自分自身の価値によって豊かになることである。他方第二巻の個人についての判断の部分では、人を人そのものによって判断すべきことを述べ、これに従ってすぐれた人物たちを選んでいる。また、第一巻では野心が最も避けるべきものであることが繰り返し論じられている。この野心こそ、第二巻でモンテニユが多くの美点にもかかわらずカエサルを三人の偉大な男性の中に入れなかった理由であり、カエサルの野心の強さは第33章で述べられている。

このように第一巻と第二巻は「なすべき行為の判断」と「なされた行為の判断」という人間に関する表裏一体をなすテーマにおいても、また、各々のテーマの展開が採る三つの視点においても、さらに、それぞれの視点に立脚する部分の根本的な内容においても対応関係にある。

5. 初版全二巻としての円環、あるいは8の字

周知の通り、『エッセー』第三巻は初版出版の8年後に追加されたもので、初版は二巻からなっていた。そこで、初版全二巻を一つの作品として考察しよう。

1.で述べたように、第二巻の最初の部分では第一巻で行なわれた判断の確認がされている。従って、ここで第二巻が前の巻の続きであることが印象づけられている。

同じことが第一巻の最終部分でなされている。第一巻第53章でモンテーニュは、人間が自分自身を考察することによって自分自身の弱さと不完全さを容易に認識するだろう、と語る。続く第54章では、「一度精神に道が開ければ」難しい仕事や珍しい事物も実はそうではないことがわかるし、「想像に調子がつけば同様の例がいくらでも見つかる」ことを述べて、第54章から第57章では同様の実例を列挙する。これによって、第53章で述べられた自己考察も「一度精神に道が開ければ」容易な仕事だとわかるだろうし、人間の弱さ・不完全さの実例も「想像に調子がつけばいくらでも見つかる」ことを暗に語っているのである (I, 54. *D. M.*, I, p. 479; *O. C.*, p. 300, a)。これが第二巻第1章の冒頭における、人間の諸行為が矛盾する例を「誰でも自分の中にいくらでも見いだすことができる」(II, 1, *D. M.*, II, p. 2; *O. C.*, p. 315, a) という言葉に続く。人間の諸行為の矛盾が「珍しい事物」ではなく、その実例を探すことが「難しい仕事」ではないことを暗に語っているのである⁸⁾。従って、第二巻の始めが、第一巻で行なった判断を確認することによって、前の巻をひきついでることを印象づけようとしている一方、第一巻の終わりは次の巻の冒頭への橋渡しの役割を果たしているのである。

このように、第一巻と第二巻にはただ『エッセー』という本の二つの巻という関係以上の連続性が存在する。そこで、次にこの連続する二巻が形成する一つの作品の始めと終わりを考察しよう。

すでに他の研究者によって指摘されているとおり⁹⁾、第一巻第1章と第二巻第37章の最後はいずれも『エッセー』全体を支配するモンテーニュの人間観を述べ呼応し合っている。

まことに人間というのは驚くほど空しく、多様で、不定な存在である。人間について恒常齊一な判断をうち立てることは難しい。(I, 1, *D. M.*, I, p. 6; *O. C.* p. 13, a)

多様性こそは自然が辿ってきた最も普通の形だから、私はわれわれ人間の気質や考えが一致するのは珍しくまれだと思ふ。世界にも、同じ二つの顔がないように、二つの全く同じ意見があったためしはない。われわれ人間の意見のもっとも固有な

性質は多種多様と不一致である。(Ⅱ, 37, D.M., Ⅱ, pp. 652-653; O. C., p. 766, a)

第一巻第1章における上記の文章が非常に一般的に人間観を言い表わしているのに対し、第二巻の最後の文章は同じ多様性でも人間の意見について述べていることは注目に値する。後者は、「いかに生きるか」、「人間についていかなる判断をするか」について判断を試みてきたモンテーニュが自己の意見は相対的なものにすぎないと表明することによって、『エッセー』を結ぶ言葉としてふさわしい。

このように、第一巻の終わりと第二巻の始めがつながり、第二巻の終わりが第一巻の始めに呼応することから、初版『エッセー』全二巻はひとつの大きな円環を描いていると言えよう。しかし、先に述べたように第一巻と第二巻が各々円環を描き、対応関係にあるから、厳密に言えばこの大きな円環は中央がくびれ二つの小さな円環が向い合った形、つまり8の字のような形になる。だが、さらに厳密に言えば、2で述べたように8の字を形成する二つの小さな円環の始点と終点との間に各々さらに小さな円環が連なることによって螺旋運動をし、そのさらに小さな円環もまた螺旋運動によって描かれているのである。従って、初版『エッセー』全体は幾つものスケールの異なる円環が連なることによって螺旋運動をしながら円環(あるいは8の字)を描いていると言えよう。

結

以上によって、初版第一巻と同様、初版第二巻においても諸章が観念連合によって結びつけられて連なり螺旋運動によって円環を描いており、第一巻と第二巻が対応関係にあり、初版全二巻が全体として、幾つものスケールの異なる小さな円環の連続する螺旋運動によってひとつの大きな円環(あるいは厳密に言えば8の字)を描くことを明らかにできた。従って、諸章が観念連合によって結びつき螺旋運動をしながら描く円環を初版『エッセー』の構成原理とみなすことができる。また、第一巻と第二巻が表裏一体をなすテーマのもとに、いずれもモンテーニュの人間の存在領域の認識と一致する自然(宇宙)・社会・個人という三つの視点にたつて展開されており、しかも第一巻と第二巻のそれぞれの視点にたつ部分は内容において根本的な点で呼応しあっていることから、

こうした展開の仕方は意識されていたと考えてよいだろう。しかし、第二巻の自然の秩序における一被造物としての人間についての判断は自惚についての部分に内包されていたり、個人としての人間についての判断の部分が第二巻のエピローグに含まれていたり、また第一巻でも各部分が交錯しあっていたりするように、この展開の仕方はかなり柔軟である。さらに第一巻においても第二巻においても各部分が分量的にはかなりアンバランスであることを考慮に入れば、モンテーニュがこの展開の仕方に沿おうとしつつも必ずしもこれに縛られてはいなかったと結論できる。

註

D. M.: Michel Eyquem de MONTAIGNE, *Essais*, reproduction photographique de l'édition originale de 1580, publiée par Daniel MARTIN, Genève – Paris, Slatkine – Champion, 1976.

O. C.: MONTAIGNE, *Essais*, in *Œuvres complètes*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1962.

初版のテキストは *D. M.* を使用したが、*O. C.* の対照ページを併記しておいた。ただし、*O. C.* で 1580 年版 (a) と表示されているテキストは 1582 年版, 1588 年版 b), 1595 年版 (c) における訂正を含んでいることが多い。ローマ数字は巻, アラビア数字は章を意味する。引用の日本語訳は岩波文庫『エッセー』の原二郎氏の訳を拝借したが、部分的に訳語を変更させていただいたことをお断りしておく。なお、引用文中の傍点は引用者。

- 1) 拙論, 「『エッセー』における増補修正のもうひとつの意義」, 『広島大学フランス文学研究, 3』1984, pp. 11–23. 参照。
- 2) 拙論, 「『エッセー』第一巻の初版における構成」, 『フランス語学フランス文学研究 No47』, 1985. 参照。
- 3) 註 1 の拙論 pp. 18–19 を参照されたい。
- 4) II, 17, *D. M.*, II, p. 435; *O. C.*, p. 616, a.
- 5) 註 2 の拙論を参照されたい。

- 6) 死が自然（宇宙）の秩序の一つであることは第一巻第20章でも述べられている (*D. M.*, I, p. 116; *O. C.*, p. 91, a)。「宇宙の普遍的秩序」は第一巻第36章でも言及される (*D. M.*, I, p. 346; *O. C.*, p. 221, a)。社会生活と個人生活の区別は第一巻第23章 (*D. M.*, I, p. 145; *O. C.*, p. 117, a) , 第二巻第10章 (*D. M.*, II, p. 109; *O. C.*, p. 393, a) , 第三巻第10章 (*O. C.*, p. 989, b) にも言及されている。

なお、ここで用いている「自然」という言葉は、言うまでもなく、草木や野山等を想起させる日本語の「自然」という言葉とは異なる意味を持つ。メナジェ氏の言葉を借りれば、「自然」は16世紀フランスの人々にとって、「宇宙を支配し、あらゆる被造物に命令する力」であり、「人間は世界の一構成分子である以上、自然の法則から免れることはできない」のである (*Daniel MENAGER, Introduction à la vie littéraire du XVII^e siècle, Paris, Bordas, 1968, p. 79.*)。

- 7) 第一巻で「なされた行為の判断」が行なわれていないというわけではない。また、第二巻で「なすべき行為の判断」が行なわれていないというわけでもない。ただし、第一巻の展開は「なすべき行為の判断」が主軸であるし、第二巻の展開では「なされた行為の判断」が主軸である。
- 8) 詳しくは註1の拙論pp. 13 - 14を参照されたい。
- 9) Pierre VILLEY, *Les "Essais" de Michel de Montaigne*, Paris, P. U. F., 1972, t.I, p. 7, note.